

表紙, 目次, 抄録, 雑録, 漫録, 雑報

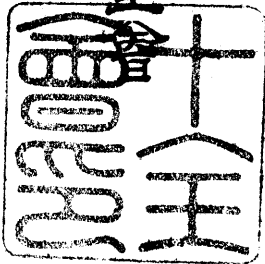
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41660

里
複

明治三十年十一月二十五日發行

十全會雜誌

第四高等學校十全會



第 四 號

◎十全會雜誌第四號目次

◎原著及實驗

○免疫論

中濱東一郎

○佝僂病ニ就テ

藤井伊之吉

○徵兵検査ノ視力試験ニ於ケル管見

岡本京太郎

○卵巢腫瘍剔出術傍觀記事

河合 馨

○心臟位置ノ破格ト助膜炎合併ノ實驗

末岡外次郎

○嘔吐ニ因スル窒息死ノ一例

久保拾藏

○副長物趾筋ニ就テ

渡邊久壽松
河内監次郎
安宅治六

◎抄 錄

○常度下体温

○膝蓋腱反射消失ノ診斷的價値

以上 松原三郎

◎雜 錄

○古加因局所麻醉法ノ進歩

生沼曹六

○赤痢病源ニ就テ

◎漫 錄

○斷々

加南耶

○暑中雜詩

勢川漁夫

○鐵腸漫錄

松原鐵腸

○白山紀行

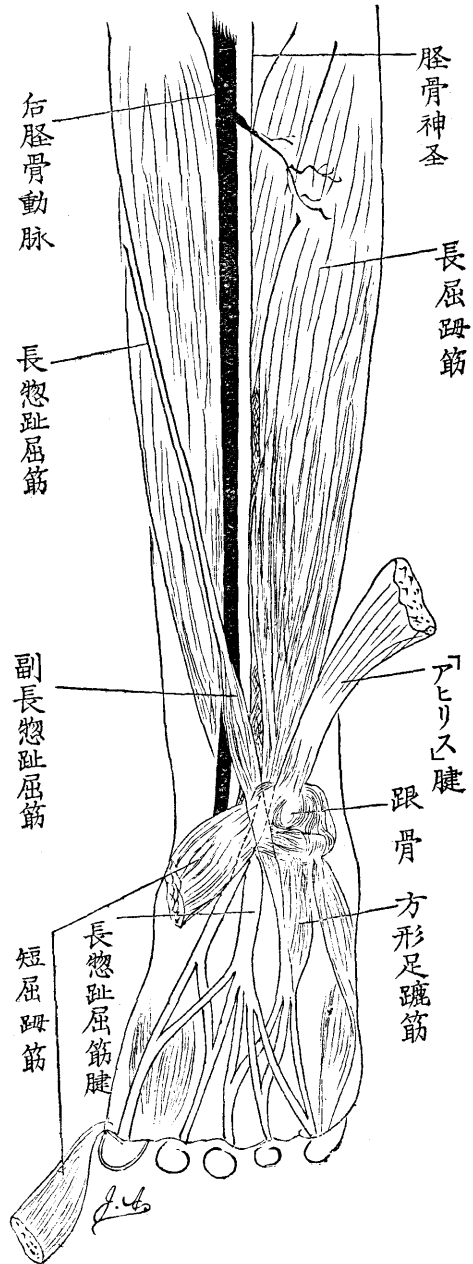
田中次郎
吉田一
橋本喜久三

◎雜 報

○數十件

◎曾 告

○數件



ニ非サルカ聊カ記シテ示教ヲ乞フ爾

抄 録

◎常度下體溫

常度下體溫 Subnormale Koerpertemperatur は左の場合に於て之を見る

- (一) 熱性病の經過中及經過後
- (二) 神経系の或疾病
- (三) 身体に急劇の作用(創傷、腹膜炎)を受けたる時
- (四) 無熱性悪液病

(五) 急性衰弱状態(下痢、出血)

(六) 皮膚の變化

(七) 劇烈なる奪温

(八) 藥品の作用及中毒

直に温度を奪却せば体温大よ沈降すると稀ならず冷氣の大道に横臥し冷水に入りたる者の如し殊に酒精の作用を兼ねる時、更に降温し二十四度に至りたる者能く恢復したる報告あり又治療上冷浴冷水枕子及冷罨法の應用および三九―四〇度より三六―三五度に下るを見る此の場合の降温著大ならざるも屢々虚脱症状を伴ふことあり

大亡液後に低温を見ること鮮なからず劇烈なる下痢に於て然り赤痢様下痢(三五度)單純の急性及慢性腸炎(三六―三五度)重症虎烈拉發作(三四、八度)に見る所なり又大出血後例の外傷的出血子宮出血(三五、二度)腸結核患者血便後(三六

度)胃癌患者吐血後(三四度)の如し

惡液病及重症貧血に於ても低温と示し癌腫(食道胃、腸、肝)は三六―三四度に下り死期に虚脱症状と發す肝硬化、慢性腎炎、汎發性澱粉變性(三五―三四度)萎縮哺乳兒、重症糖尿病(三五度)惡性貧血の末期(三四度)も又下降す是れ酸化機能の遲緩、慢性滋養不給、中毒作用(例は潰爛せる新生物に於て)に由る其他輕症の原發及續發貧血例は萎黃、病後恢復期、衰弱したる比卜昆瑤兒、鬱幽病、麻痺狂も下降すること多し重症血行障礙は常度下體温を現はすこと罕なるか如し然れども血行障礙により酸素攝取缺乏は体温發生の減少すること勿論なり心臟瓣膜病に於て代償機障礙時に降温―回復せは又平常ふ復す其他僧帽瓣閉鎖不全(三五度)氣道狹窄(三四、二度)も下降するか如し

中樞神經系諸病に降温するは頗る興味ありて病

機直接に温中樞或は脈管神經と襲いて温調節を紊亂するに由るならん結核性腦膜炎(三九度より三六一三五度)漿液性腦膜炎(三五、五一三四、四度)腦出血(三〇、三度)腦栓塞(三四度)(一)半は心臓病の血行障礙に由る)腦腫瘍(三五、一分)腦脊髄梅毒及び癩狂者の進行性麻痺も下降し「ラインハルト」氏は後者の二二、三一二、四分と示したる二患者と實驗せり此れ從來發見せられたる體温の低下中最も甚しき者にして温調節中樞の障害に由るものならん脊髄損傷は屢々昇騰—麻痺性偏頭痛發作(三六度)は下降す又知覺神經を刺戟せば血温減退し創傷、外科術、腸箱頓、腎石痙痛、胆石痙痛の如し内穿行、腹膜炎、蓄便性盲腸炎も一時低温に至ることあり
 或る皮膚病殊に汎發温疹、蕁麻疹、硬皮病、廣汎火傷、熱發皮膚炎は體温の下るは皮膚の充血より温放散の増加するに原因するからん

熱性病の經過中体温の沈降は注目と要し脱熱せは常度に止らすして尙更に半乃至二度以下に沈降すること多し一般に熱の連綿急速に解脱する麻拉利亞、膿毒熱、日晡潮熱は沈降著しきも虚脱を發せず反之解熱急あるも間斷ある者及解熱緩徐ある纖維性肺炎、麻疹、腸室扶斯、實扶的里、丹毒は下降著しからず亦解熱後體温久しく常度下に止まるものあり腸室扶斯、熱性腸胃加苔兒、肺炎、實扶的里、麻疹、痘瘡、間歇熱等の如き其他熱病の經過中常度下に下ること稀からず殊に膿毒症、腎孟炎、腎孟腎炎、肺炎、は時々大に昇降す稽留性熱病は治療及體內解熱機轉(出血、穿行)に關せずして體温低下を來すこと罕なり
 熱病の死前體温低下は緊要にして肺炎(三八、より三四、二分)敗血病(四〇より三六度)多發性骨髄炎(三五、八分)肺炎合併の實扶的里(三九より三五、二分)急性粟粒結核(三五度)の如く多くは

重症の虚脱を伴ふ

毒物作用に由る體温沈降は屢實驗し燐中毒(三七度—三三、三分)は酸化機衰弱に由り神経毒及筋毒は皮膚血管擴張のため温放散と増加せしむるに由る酒精(三五)亞篤魯必涅(三五)莫爾比涅(三五、二—三四、八分)石炭酸中毒(三五二分)の如し

毒症の三八度より三四度に低下することあり糖尿病性昏睡は三三—三二度に下り一種の酸類中毒なりと云ふ黃疸に於て體温三六度脈搏五二至にいたる事あるは胆汁酸鹽類の血中に入りて温調節及血管運動中樞を刺戟するに由るなり
以上の論點を括約せば常度下体温の源因左の如し

解熱藥中に於て安知比林、安知歇貌林、撒里矢爾酸は新陳代謝の減却及皮膚血管の擴張によりて解熱し規尼涅の唯組織内の發温を減却せしむるなり

(一)直接の奪温
(二)多量の体液亡失
(三)慢性貧血、惡液及滋養不給
(四)重症の血行障害

重金屬の新陳代謝及體温に及ぼす影響は未だ詳ならざるも汞劑の久しく連用せし時により體温を減却し慢性鉛及砒石中毒の體温變化の不明なり

(五)中樞神経系統の諸病
(六)知覺神經の刺戟及脈管運動神経病
(七)廣汎なる皮膚病
(八)熱性病の經過中及解熱後

自家中毒に於て常度下體温を示すもの少るからす是れ血液變調の温中樞を侵すに由るならん尿

(九)毒物及體內化生毒の作用
然れども健康人にして常度下体温(三六度位)を

示すことあるも、毫も其原因を証明する能はず蓋し人種、氣候、年齢に従ひ体温に少許の差あるは勿論なり一般に健康人は朝六時に平均三六、五分夕六時に三七、二分を示す者多し

要之常度下体温は普く世人の信するよりは多く見るものにして且つ絶對的にお惡徵ありと言ふを得ず亦虚脱なる名稱と一定の体温と聯合し三十六度以下の体温を虚脱温ありと言ふか如き「ウンデルリツヒ」氏の古説は妥當をらざるか如し此れ体温著く下降するも虚脱を發せず重劇の虚脱に陥るも常温度或は高度に止るものあるを以てなり故に常度下体温は衰弱家或は惡液質に發して再び常度お復せざる場合と除くの外は豫后の凶なるを示すも未だ瀕死の兆にあらざるあり(濟生學合新事新報第五十一號)

◎膝蓋腱反射消失の診斷的價値

腱反射の原因は諸家説を異にし、*W. G. 氏*は反射説

を唱道し、*W. G. 氏*は筋肉説を主張す而て「*エルプ*」氏は普通の反射作用により刺戟脊髓より來り次て四頭股筋の収縮するものとせり然れども反對者曰く膝蓋腱反射の通常皮膚の刺戟に由る反射より大に短時間として來り尙ほ膝蓋腱の神經を切斷するも反應あるを以て他に原因あらんと亦筋肉説よりは緊張せる腱に蒙る動様筋に波及して収縮と來すものありと近來 *Thomas* 「ガワース」氏およれば患者をして下肢を懸垂せしむる時は筋の緊張し局所の刺戟に對して過敏となり爲めに筋収縮を生ずるありと其他 *Eden* *Love* 氏は臨床上の實驗に徴し反射作用消失せる患者は腱反射も共に消失するを認め腱反射發生は筋の緊張、分布神經、脊髓の作用完全なるを要することと説きたり

膝蓋腱反射中樞は第三及四腰神經の起根部にして腰部膨大なりとす若し腦より來る抑制纖維を

侵す時は腱反射亢進す即ち側索硬化症の如し亦
腱反射消失は末梢神經炎、筋肉病、脊髓病に來る
も病竈部の異なるに従ひ尙諸種の徴候を併發し脊
髓前角を犯す小兒麻痺は筋及骨の榮養變化と生
し後索を犯す脊髓勞は運動、觸覺、壓覺、溫覺、筋
神を失ひ末梢神經炎の如き知覺及運動纖維の犯

て初め腱反射稍や亢進するも多くの全く消失し
知覺脫失の特異なるに由りて脊髓勞と鑑別する
こと容易なり亦癩病は諸家の説により末梢神經
炎にして腱反射消失するも近來鈴木重道氏の報
告によれば却つて腱反射の亢進するもの多しと
然れども未だ確信を措く能はず

さるゝ度の異なるに従ひて知覺消失するも運動依
然たることあり亦實扶的里亞麻痺の如く運動纖
維の犯す事著しければ運動系の兆候を呈す其他
表及深反射は常に相提携するものにあらす脊髓
勞の表反射のみ存し半身不遂症の深反射のみ存
することあるか如し

鉛毒麻痺は初め上肢に來りて伸筋を侵し末期に
至り下肢に及へは腱反射消失す是れ筋の羸削に
因るも畢竟神經炎に基つくなり故に末期に於て
は其鑑別に苦むことあり亦痲痛及齒齦炎等によ
りて之に類似せる進行性筋萎縮と識別し易し蓋
し本症の病理の今尙は一定せずして「ライデン」

神經炎に於て實質炎なれば反射全く消失するも
間質炎は却つて亢進し又た運動神經を犯す時は
知覺のみ依然たるも知覺神經なれば全く之れに
反す

氏等は第一期に末梢運動神經の變性萎縮第二期
に筋肉萎縮を發するものとし「レマーク」氏は脊
髓の前角炎に基つくものとせり是れ一筋属の羸
瘦を見るによるあらん

脚氣症はロビン氏に據れば多發性末梢神經炎よし

實扶的里は我國にありては病勢只た咽喉及喉頭

に限局せるものゝ如し然れども「ドンネン」氏の臨床的實驗報告によれば病初他の神經症狀を發せざる前或は初發症狀として膝蓋反射の消失を來たすものなりと且つ病初より必ず腱反射の消失は咽頭實扶的里なるや否やと定るお足り尙は

神經系の犯されたるときは病初必發の症狀にして豫后上著しき關係なしと亦「ブツザルド」氏の研究に據るに此の反射消失は本病初發の兆候として必發し本症全治するも反射消失は持續するにより脊髄勞の共同運動障礙と誤認することありと

然れども又筋肉の収縮的物質減少のため収縮力不全となりて反射消失する事あり例は筋病性筋萎縮症及假性筋肉肥大症の如し往々前角炎に續發する筋萎縮と誤認することあるも臨床上容易に判斷するを得可し

糖尿病よ於ては必ず腱反射消失を招くものにし

て其原因は全身衰弱のため頭股筋の収縮的物質の減少によるか或は末梢性神經炎を基くならん亦「トムソン」氏病も「ブツザルド」氏は腱反射の消失せる本症と實驗せるに由り該病を以て筋肉的疾病なりと説けり

麻醉藥のため一時膝蓋腱反射の消失することあり又癩癩及卒中發作時及輕症の熱性病に於て腱反射消失することあり然れども解熱せば舊に復し或は却て亢進す睡眠中又た腱反射と見すして睡眠の度に比例す

脊髄に於て腱反射障礙を招くものは脊椎骨及骨膜並に脊椎自己の疾患なりとす就中脊椎骨瘍は最も脊椎部に來ること多きを以て下半身癱瘓及腱反射亢進を發するも腰椎部に生ずるときは膝蓋腱反射中樞の腰膨大部と犯すを以て下半身不遂及腱反射消失を見るへし其の他の一新生物亦然り」小兒麻痺は多くは腰膨大部に來り兩

側を犯せり下半身不遂、腱反射消失、下肢筋肉羸削と發するも脊椎部なるときは其症狀上肢も限局せり膝蓋腱反射の變化を生ずることなし

脊椎勞ふ於て反射消失は一特徴にして後角及「ブルゲツハ」氏索を侵すも時により破格的に却て腱反射の亢進をとるゝあり是れ脊椎硬化を合併するものならん」 脊椎炎及脊椎膜炎は腱反射

消失すること尠なし」 腦脊椎多發性硬化の一 般に反射亢進するも腰膨大部と犯す時ハ消失し 診斷に苦しむ事あり「ブツザルド」氏の論據およ

るに該硬化症に於て一側或は兩側の腱反射消失し、其消失側に *Ankle-clonus* を存する事あるは腰膨大部の前角を犯し同時ハ側索に侵襲を蒙ひれるによる徴候なりと云へり」 進行性筋萎縮は前角と犯かして筋肉消削し下肢に波及せは反射全く消失するも同時に側索を犯す時ハ却て亢進とへし蓋し進行性筋萎縮、側索硬化、球麻痺の三

者は互に合併すること多し」 「バスチアン」氏の背部及頸部全横徑性脊椎炎に於て膝蓋腱反射の消失せるものを實驗せり然れども「チャクソ」氏によれば脊椎の外傷に因する震盪症は腱反 一時消失するも直ちに恢復するものなりと言ふ」 先天性遺傳性共同運動障礙症即ち「フリードリッヒ」氏病に於ては初期に腱反射消失、言語澀滯、眼球震盪、共同運動障礙を發するも脊椎勞の如く眼筋麻痺、視神經炎、及知覺營養異常を招くことなり」 *Ataxia foraplesia* 及 *Ataxia sinaitica* は共同運動障礙を來たし爲めハ脊椎勞

及「フリードリッヒ」氏病に類似するも元來 *Ataxia paraplesia* は後索及側索の疾病なるにより腱反射亢進及知覺脫失を發するを以て鑑別するを得」 小腦の疾患ハ往々腱反射消失及共同運動障礙を來すも頭の位置及強迫的位置により認識するを得可し(醫海時報第百六十六七號)

雜 錄

◎古加因局所麻醉法ノ進歩

生沼 曹六

一千八百八十四年 Koller 氏か古加因の局所麻醉

作用を發見したる以來濫潮の勢を以て外科的手術の範圍お横溢—從來疼痛の手術を施すに際し患者の楚痛を減少せしむる目的を以て行はれたる神經壓迫法驅血的麻醉法及冷却麻醉法は殆んど其位置を奪はれ「クロールノチール」及「クロールエチール」の如きは種々不便なる點に於て記憶の外に驅逐せられ古加因は實に局所麻醉藥中の霸王とあれり然して無二の麻醉藥として稱用せる「ツロ、フォルム」の區域すらも狹びるに至れり

此の如くして古加因の應用日一日盛なるに従て其注射の方法及ひ藥液稠度の上に大なる改良を受けたり而して注射の方法に關係して現今浸潤麻痺 *Infiltrationsanästhesie* 及所轄麻痺 *Regio-næranästhesie* の二あるを見る

浸潤麻痺は *Schleich* 氏の發明せる所おして爾來人多く之れを用ひ體中殆んど之れを用ゐるに適應せざる所おし只た厚鞆頭皮掌蹠の如き或は癩痕組織の如きときに甚た注射の困難を感ずることあり

Coning 氏は一千八百八十七年に於て一知覺神經の周圍は四%の古加因水と注射せれば其全分布區域に三四分時の知覺麻痺を來すを見たり尤も注射部の上に於て驅血帶と置くことを要と氏は茲に外上膊皮神經を用ゐたり但し氏は其發見

を實用に供せざりし氏の後に所轄麻痺に就て少しく述べたる人 (Painberg) ありたれども世人の注意を喚起せしめて却て所轄麻痺の存否を疑ふ者あるに至れり其后 Reclus 氏其他諸氏によりて發達せる古加因麻痺は只單純の局所浸潤麻痺にして且つ其古加因鹽の百分比例「シュライヒ」氏溶液 (〇、一—〇、二%) ニ比し甚だ強し今日に於ては如斯強液の無用なること疑を容れざるを「シュライヒ」氏モ又所轄麻痺に就て少く述べたることあれども純粹なる所轄麻痺を應用せるは實に Ober 氏よりて氏は數年前既に「ハルレ」病院の外來患者に就て充分の實驗をなせり氏か實驗は Penize 氏によりて世に公にせられたり局所浸潤麻痺と所轄麻痺との區別尙未だ十分判明ならざれども指趾に於ける所轄麻痺の方法に至ては今日尙遵守する所なり

之を抄録すれば (一) 一%の古加因水にて毎時各

部に所轄麻痺と起し得 (二) 所轄麻痺は只血行を全絶し得且つ神經吻合と全く遮斷し得る所にのみ確實に行はれ得即之れに適するものは手指と足趾あり (三) 局處浸潤麻痺は注射后直に麻痺を生ずれども所轄麻痺は注射後五分時間以上の経過を要す乃ち指又は趾を麻痺せしめんには護謨管と以て其基礎部を緊絞し其端を足關節又は腕關節に於て結合し置き密に護謨管に接して其指 (趾) 尖側を注射器を指 (趾) 尖に向けて注射す注射は四條の神經幹に應し四個所を之を行ふ一%の古加因水にして一所に「プラワーツ」氏注射器四分一—半箇宛とす (故に全量 〇、〇一—〇、〇二の古加因鹽なり) 此四個所の注射は必要なるものあり何となれば唯肢節の一側に於て手術する時に於ても神經の末梢吻合と遮斷せざるへからざるを以てあり

Reclus 氏は無益にも二%古加因水を用ゐる血行

遮断と必要と認めざりし然れども此事甚た必要
なれば此法と試みんとする人は必ず血行を断ち
且つ必ず指趾に限り之を施すへし血行を絶たす
或は指趾の他に之を用ゐれば其効を見ざるあり
指趾の他も強て適當の部を求むれば之に接する

手足の部とす之を麻痺せしむるには例へば手に
ありては上膊又は前膊と護謨管にて緊縛し手背
手掌に於て四條の神經幹の周圍に注射を施すに
あり

所轄麻痺の利益とする所は(一)用量の僅少なる
爲め其中毒を避くるを得(二)注射は之れを健康
部に於て行ふを以て注射による疼痛(此疼痛は
性浸潤部の注射さるゝに
より一層劇きものなり)を殆んど全く與へし
めす(三)局所注射の爲め膿を驅て炎症を擴むる
の恐れるし(中外醫事新報四百十六號診療新報
欄より摘録)

余は屢木村恩師の「ボリククリニック」に於て此所

轄麻痺と陰莖に應用する時は全く無痛的に陰莖
切斷術すらも行ひ得ることを諷されたるを聞け
り然らば即ち之れ迄諸氏か所轄麻痺は指趾に
限りて施し得へしと云へるものに陰莖の一區域
を加へ得るものなるを信す

Esmarch 氏は自著の軍陣外科學局所麻酔の條下
に古加因注射法を述べて曰く藥劑は之れを損傷
せられざる皮膚に塗布するも其の効を奏せざる
を以て之れを應用せんには注射によりて皮下に
持來されざるへからず而して其方法は五―十％
の溶液を以て充されたる「プラワツツ」氏注射器
を麻痺を望める區域の周圍二三所又刺入し間歇
的注射すへしと余は此の法を以て所轄麻痺を
拆衷し身体の凡ての部分に行はんとするものと
せり

古加因溶液の稠度に關しては今より七八年前に
用ゐしものゝ今日の如く稀薄なるものにはあら

すして大抵十一五%のものなりき明治二十三年
(西曆一千八百九十年)佐藤進博士の古加因實驗
報告中には……余か最初外科手術に使用せる古
加因の量は方今用ゐる所のものに比すれば稍多
量ありし是れ「コーニング」氏に據りしものにし
て即ち一〇%古加因溶液一回の量二箇乃至三四
箇を各部に分配して注入せり然れども近來用ゐ
る所の量の五%溶液二箇乃至三四箇を各部に分
配して注入するにあり此法に據れば大約五六分
時を経るの後麻痺の効を収むることを得へし……
と記載されき然れども其後古加因中毒の詳細に
研究されし結果其稠度と稀薄にして其効力を旺
盛ならしめんと企てたり而して此の企圖は無益
ならんとして古加因麻痺の上に大なる利益を與へ
たり

從來古加因麻酔法に供せし溶液は主に冷液のみ
なりしか一千八百九十六年 Tito, Costa 氏は攝氏

五十度―五十五度の温液を用ゐて其効を得たり
と云ふ液の稠度は〇、四―〇、五%にして氏は其
効力の速且確なるを証せんか爲す兩側竅蹠脱腸
を手術せし一例を引證せり即ち左側は大綱「ヘ
ルニヤ」なりしか攝氏五十一―五十五度の温液を
注入して(古加因の量は二、五仙瓦)百五十瓦の
綱を切除し一大脱腸嚢を摘出せしも患者毫も疼
痛を訴へざりき次て右側の盲腸脱出を手術する
に冷古加因液を注射せしに患者の皮膚と切開す
るに當て既に疼痛を訴へ古加因五、五仙瓦を用
ゐしにも拘りらず麻酔不充分なりき(順天堂醫
事研究會雜誌二百四十八號抄録轉載)
一千八百九十七年 B. Hackenburg 氏は手術上局
處の知覺を麻痺せしむる目的に現今に至る迄使
用せる二%の古加因溶液の代り「コカイン、オ
イカイン」溶液を應用せんことを勸奨せり蓋し
此液は古加因の半ばに之と同量の「オイカイン」

を加へたるものにして其知覺を麻痺せしむる作用は二%古加因溶液よりは少からずして「オイクイン」の中毒性に至りては僅に少しとす此故本混和液と使用せんには二%の古加因同價溶液を用ゐる古加因の極量(〇、〇五)に達するを先たち其大量を消費するを得可し」氏は「コカイン、オイクイン」散を稱用せり其處方左の如し
鹽酸古加因 鹽酸オイクイン 各〇、〇五
以上の散を貯へ置き使用前を煮沸せる蒸溜水五立方仙迷に溶解をへし此散は又粘合藥を注加すること無くして強壓をるによりて小板に作ることを得へし(醫海時報百六十六號抄録轉載)

「バ」に因することと公にするや我か北里博士は本邦の赤痢も同じく「アメバ」に因することを唱へ又實地上に証明したり然るに中濱、緒方博士等は研究の結果「アメバ」も發見したりと雖も「アメバ」の單に副作用をなすも止まり且つ普通腸加苔兒等にも發見をるものにして眞の原因は必を一種の黴菌に依ることを唱へたり、然るに近日東都の某氏より野田教授にあてたる通信の端に北里博士は「アメバ」説を捨て黴菌説を取り實に近來其の病原たる一種の黴菌を發見せりと」嗚呼日あらずして吾人の博士の嶄新なる報告を耳にするを得むなり

漫 録

◎赤痢病原よ付て

嘗て泰西の諸家熱帶地方の赤痢は一種の「アメ

◎斷 々

迦 南 耶

(1) 外國語の修養

細緻綿密なる醫學の研究を爲さんとするもの、新周到なる藥學の學說と知らんとするもの若くは現代の醫學をして猶發達進歩せしめんとするものは其の國語の外又外國語の智識と有せざるへからず況んや我醫學か輒近驚く可き進歩をなせしめんとして外國語の影響によるよからずや

總ての新らしき發明中我か醫學界お於けるものはと其勢力の大にして影響の著しきものあら—故に苟も此の閃電迅雷的の醫學界の趨勢に伴ひ進歩に後れざらんとせむ力めて泰西大家の高論を讀み卓説を聞かざる可らず若し此時に當て外國語に於ける素養なく造脂多くん幸にして親切なる翻譯のあらざる以上は周到なる紹介あらざる以上は趣味ある理論も利益ある學說も遂に全く之れを知らずして止まんのみ

吾人は諸君か外國語—少くとも獨英の二國語—

に於ける其智識と實力とを涵養—以て現代の醫學をして更に振興の期運に會せしめん事を希望するものなり

吾人は諸君か其正學課の傍ら務めて語學の研鑽に熱中せられん事と切望するものなり。

(2) 化 學

疎粗なる巖塊を疏解して燦爛たる精金を得渾珮たる寶珠を熾灼して無影の氣體を生じ、氣體、氣體と逢ふて液體となり、液體、液體と逢ふて固體を化生し其際明光と放ち鳴響を發し激熱し冷却し染彩し褪色す是れ其の識る可らざる所、觀る能はざる所、一種靈妙深遠の「機」ありて存するにあらざるいならず

世界の物質何物か此化學的抱合より組織構造せられざる既お化合す其間た又た彼の靈活微妙の「機」の蘊秘含蓄せられずんいならず

於茲平化學の永遠に廣く無限に深し今物質と

取り抱合し分折し之れと静思し淡考す幾多の趣味と快樂あり此間の消息敢て局外者の知る所もあらず化學者リービヒ氏曰く「化學の人の極め難き造化の驚く可き事物に當り最も適當の明解を與ふ」と

化學は實に吾人又哲學的の幽奥ある觀念と高潔ある慰藉とと與ふ

(3) 化學と名士

吾人の有名なる文學者及政事家にして屢々化學に親むものあるを見る

今より參十年前愛蘭アヴォンデールの或る巍々として雲お聳ゆる高塔の絶頂に眼も眩らみ足も震ふと物どもせず快然として打ち跨れる青眼美髮の一童あり前に馬鈴薯を煮るに用ゆる一個の鐵鍋を据へ之れは焔立つ石炭を滿たし或る鉛の塊を熔かさんとして毫も余念なきものゝ如し是れ愛蘭土無冠王愛蘭黨領袖パーネルか猶其幼

時人が彈丸の最簡單なる製法の熔焔せる鉛を高所より滴下せしむるゝありと云ふと聞き是を實際に試めさんか爲め斯くの高き梯子を攀ち危き屋根を這ひて茲に來れるあり渠れか科學に對する嗜好の熱心の幼時猶斯くの如きものありき渠れか科學の嗜好は寧ろ先天的のものありき其年老ひし後も渠れか唯一の娛樂の數學的書籍を讀むと化學的實驗を行ふにありき嘗てパーネル委員會議中渠れか其手を釣り縋帶にかけて出席せしが人の大に之れを怪み且つ驚ける色あり然かもこの是れ刺客は逢ひしにもあらず撰擧争の車より落ちしにもあらず只或る鐵塊を熔焔して之れを試験するに際誤て其手を硝酸にて燒きしものなりしと

又十八世紀英國文學の巨人サミュエル、ジョンソンは其晩年一種の厭世的所謂安心を説くに及んで渠れが唯一の娛樂鬱散とせしり亦た只だ化學

の實驗おありしのみ而して彼か此嗜好は千七百三十九年ポール・ハーヅ傳を著し、時に胚胎すと云ふ彼か書齋は極めて狼藉散逸、卓上又は幾多の藥櫃と陳へ室内異臭に充ち被氈は劇劑の爲め汚さる彼は日夕此の裡にありて試験管を手にて試藥瓶を取り或は抱合し或は分析すると以て無上乃樂とせり

「世界の兒」「獨逸の花」ある大々の詩人ゲーテも其内部にありては又化學熱心家の一人ありしなり彼は獨り化學のみならず鍊金術鑛物學にも通し又顯微鏡學にも精しかりき其解剖學に於ては「脈骨」の發見を以て名高く植物學に於ては「植化醇論」の出版を以て顯はる理學に於ては嘗て大に「光學」「色學」に就てニュートン派と論争する處ありき彼は斯くは如く幾多の科學に精通し研鑽する所ありしか化學も亦彼れ最も深く造り脂せし所乃一科なり彼が化學に於けるや解剖學植物學若くは物理學に於けるが如く敢て炳然として見るべきもればなかりしとの云へ然かも彼か其少時スピールマン氏お就て其親切なる化學乃講義及實驗と傾聽せし以來それ老年お至る迄彼は決して之きを擲ざりしなり常に間斷なく倦怠なく孜々營々として之れが研究に勉めたりしは毫も凝なき事實ありとす

斯くの如く烈火熱血の愛蘭政界の首將も只一の冷々然たる化學者のみ謹嚴剛直ある英國文壇の巨人も亦た一の無邪氣なる化學者のみ獨り其後者にありては單に化學のみに限らず總ての所謂「科學」に於て最も熱心なる最も銳意なる一箇れ科學者なりしなり

斯くの如く幾多の名士が消閑の餘技として化學の間出入し緘想默思以て其緻密と沈重と靜蕭とを養ふは之を現代の所謂政事家及文學者か孜々として將に其忙殺せらまんとするに比し其優

る處果して幾歩彼等か能く陰淡なる議場を其眠りより醒まし幽鬱なる文壇を其死より活かすも此亦其因て來る所あらずんはあらず

落花撲面悼君時玉樹凋權逝若期埋骨夜臺空帳々
鶴聲且惹士林悲

學友矢口君を惜みて

筆なけて悲し雁乃別をかな 小袖生

悼矢口雄司君

思きや虫け音けき淺芽生れ

露と消にし君そかなしき

明日よりは誰とかわりてなくさまん

學の窓れ友なしにして

噫君尙春秋に富み將に大になすあらんとして此

事あり悲哉

◎鏡腸漫錄

松原鏡腸

(其五) 夏れ小川

賤れ乙女か繰る糸乃 永き日影も傾きて

夕日いろどる山邊より ふるや夕立一しきり

峰行く雲の涼しさよ

湯浴に月を碎きつゝ 今日の塵をや清めけり

◎暑中雜詩

勢川漁夫投

驟雨

電光驅霹靂白雨洗乾坤窓外生涼氣日晴點滴喧

夏夜

村莊清夜奏幽簧簾外微風興自長冷氣如秋應罷扇

竹陰深處月蒼々

咏池蓮

數莖雨過動清香真個蓮花似六郎池上夙多新月夕

向人楚々淡明粧

畫山水

山腹柴門一院深松聲裊々在遙林吟人展席詩思好

修竹高梧澗水潯

吊友人矢口君

あびく蚊遣を後に見て 纏ふも軽るき蟬衣

水面の花も見よどかや

燃わつ消つゝ又もなつ

流き乃歌を身おしめん

浮艸てらす螢こそ

水のまに々揺らまつゝ

青葉ともるゝ十六夜月 照すなりけり隈もなく

小舟の心地すめるらめ

露るく床の戀しきか

星の真砂のいや清く 流乃底お香へるは

よしや玉おと籠とても

靡く團扇に吹かまつゝ

彼乃世乃夜をも守るかや

螢の狂ふうなる兒の

又も行くなり艸がくま

笹葉虫籠手に持ちて 歌ふれのこや乙女等の

更け行く鐘を數むつゝ

ひとりたゝすむ丸木橋

互に笑める無邪氣さい

すゝむ袂に風かるく

月に浮きてまどろめは

我は歸らじ昔には

夏はながきぬ逝く水に

夜半の白玉番ふまで

行く手をふさぐ蓮花

心よかゝる雲もなく

あはき今宵の露となり

誰になびくそ糸柳

月の桂は澄みまざり

あはき今宵の露となり

晝ける文乃行先は

葉末お宿る由もがら

あはき今宵の露となり

流の末や見ぬわかぬ

寝よどの鐘に送らまつ

あなや螢の夫ならて

もゆる螢の飛びかふは

音いて散きる露一ッ

せめての獨り待ち詫る

れりて此世お迷ふかや

若葉越にも見ゆるなる

あなや螢の夫ならて

若葉越にも見ゆるなる 葦屋を漏るゝ灯の影に

末野を風の吹くなべに

折りく笑みの聲もせば

樂しき妻や宿るらん

音いて散きる露一ッ

折りく笑みの聲もせば

折りく笑みの聲もせば

◎ 白山紀行

田中一次郎
吉田幡誠
橋本喜久三

雄壯活潑の氣象を養成し敢往進取精神と發揮するにあらざるは博識俊才の域に至はの難難又堪ゆる能は又驚天動地の偉業を企て鬼神を泣かすむるの大英雄天巧を奪ふの大豪傑となるを得ざるあり然り而して其氣象を養成し此精神を發揮せんには孜孜机上の硬學に待し鴻儒と談するの外須らく山水の勝區と既涉し以て膽心を鍛鍊を可し而るに博識俊才の著しせし書冊は求むるに易きも英雄豪傑賞したる山水は探くるに難きと如何にせん蓋し北陸の地勢は是等勝區の山水に乏しからず其間に偉人傑士を多く生せしめたるなり加賀の白山越中の立山突元として雲表に聳る巔雲の四時消退をることなく南北相對峙して互に優劣を争ひ能登の海水超然別天地と劃して風景明媚眺望絶住此の高山と併せて北陸は三大觀となし苟も身此山水の氣を稟け此北陸を生を受くるもの豈斯大觀と一見せずして可あらん

や余等未だ嘗て好時期を得を毎に竊に以て憾となす今茲に明治丁酉九月時や至りけん期や熟しけん吾々の學年は既に辛して局を結ひ夏期休暇の於正月最中となり數百の全友暑を避けて或は故山に省し或は温泉に浴し古跡を訪ひ名所も遣ひ各其好む處に任を於此乎鬱勃の氣烟霞の癖禁せんと欲して自ら禁をる能はと遂に意機相投し乃ち余等外一名と共に白山絶行を企て衆議一決明午前四時犀川橋上に相會せんことを約す時又二十三日午后五時二十四日 集合の約遲を漸くにして犀川橋上を出發せしは午前五時十五分あり天氣清朗和照一點の纖翳を止めす恰も春色の閑麗なるか如し一行の健脚軽く雜談濃かに十數町を過ぎ地黃煎郊外に出つるに黃頃の青田香稻正に實りて穗頭重く風よ従つて勳提する狀恰も碧海の春濶を疊ひか如し一つ屋、窪、高尾を経て額谷に到り村内の

社前に休憩する暫時四十万、曾谷、坂尻、月橋、等
數村を經八時五分鶴來に達せ此日在郷軍人の簡
閱點呼の爲め鶴來へ集合するものに出會を回顧
すとは彼等は征清の軍に加はり櫛風沐雨邪寒隆
暑を侵し飢寒飢凍堪へたるものにして羽織袴
に二三の勳章を帶ふるあれは凱旋解散時に賜は
りし軍服を着るもあり赤帽美男の近衛あり黃
章丈高の砲兵あり殊に荷吳座に軍帽を戴きたる
は一笑に堪へたり鶴來は山間の一小都邑にして
商業繁盛就中烟草製造の業大に發達し町民過半
之に従事を本年政府の烟草專賣所を此地に設置
せしは其所以ならん白山比祥神社に參拜稍々久
して一行の安全を祈る夫きより路を轉し西南に
向ふ層障重巒手取川と狹み山勢の起伏する様頗
る奇觀なり中嶋村と過ぐ時に左側山腹より數十
の役工盛に石材を採掘するを見る十時に直海村
に到り暫時休憩すきは稍々空腹を訴ふ依て携ふ
る所は行厨を出し其半を喫し相促して福岡江津
を過ぎ吉岡の小祠より休憩す折節一僕を従へたる
有鬚の田舎紳士祠前を通過し一行に向ひ「ドナ
タモ」と語を交へ去る是を恐くは近郷の竹庵様
ならん乎行くこと數町手取の水洗滌困泣對岸の
松林蒼然として好藁實に愛せし正午吉野へ着
て金澤を距る七里なり一小亭に休憩して餘半の
行厨を尽くし吉野の清幽を探らんと亭主に尋ね
り既に通過せしと云ふ依て歸路の樂となし此地
を發し炎威堪へ難く苦汗下り王漿流る行くこと
一里忽ち滔々流々掬をへきの響あり是れ手取の
一水源にして水は清冷渴を醫するに足る佐良市
原を經て下木滑村に至きは渴益々甚し仍て民舍
を一腕の無心に預る其味實に美よして甘露尙且
及ふへくもわらず土瓶を轉すること數回三時四
十分木滑新村にお到きは道岐れて二どあり甚迷ひ
しも村民の親切おより安きを得たり夫れより深

さ數十丈の谿間に架せる飛橋を渡り峻坂を上る
こと數十歩再び路分るゝも右牛首左中宮の文字
を刻したる石碑あり以て便を與ふ余等其右を撰
んで奔る山崩れ橋墮ち一帶の徑路漸く牛馬の往
來に適を崖を舉ち谷を渡り殊に土人の「ハラケ」
と稱するものゝ如きハ頭上を仰けは高く巨岩亂
石相迫るの勢當さに墜つるにあらざるやと疑は
れ脚下を望めは深く斷崖削壁相倚るの狀奈落に
も達しなん其半腹僅か二本の丸木を谿間に架そ
るも兩岸既に崩壞して丸木は墜落の運命近きを
示し之を過ぎし當時を思へは今も尙ほ寒心戰慄
を覺ゆ四時三十分女原に到り木賃宿北浦源左工
門方と撰ひ手取の清流と利して終日の苦汗を流
し以て浴に代ふ已に以て晚餐至る粗菜も一層の
美味あり八時半就寢せしも蚤兵蚊軍交々襲撃し
て安眠を得と轉々煩悶堪ゆ可らず遂お十時半頃
一同起きて爐を圍み茶を喫し暫時雜談の后再ひ

床に入るも各樂しき夢結ひ敢て呼へば直又相
應し衆殆んど徹夜せり

二十五日 僅かに一時間半許の熟睡にて勇然離
床せしは午前四時戸を推すに一天々濛雨模様わ
り依て心ならずも急に朝餐を命し行装を整へ五
時二十分女原を發す山路羊腸崎嶇とて手取沿
岸の怪岩奇石天與の絶景をなし苦痛の裡にも愉
快を感せしむ五味島附近に至れば急流に一の危
険なる橋あり之れを有名ある一本橋にして長さ
三十間高さ廿五間巾一尺辛ふして一人を通す而
も其中程に至れば体重の爲め上下に前進の爲め
左右に動搖し恐怖畏懼冷る眼暈み漸くおして
渡れば階子にて礫原に下る是亦一奇觀なり終に
尾口村に到る金澤を巨る十一里とあり此間昨夏
水害の慘狀今尙ほ存し畑は堤を築き屋は地に没
し洵も當時の悲劇と察するに餘あり低徊之と久
ふと七時十分又も危険なる一本橋を渡り深瀬村

と過き蒼々森々たる杉林に入り女原より白峰に
往復する一負荷と共に憩ひ更に進めは山徑尙河
畔を沿ひ蜿蜒行くとして目と娛ましむるの山耳
を洗ふの川わらざるいかし流瀧々氣浩浩神心爽
かなり又遙に當て長さ二間斗徑五寸斗の丸木橋
千仞の絶壁に懸り身軋さ心怖ふ桑島を過き稍々
快濶なる野原に憩ひ急歩白峰に至る時に九時三
十五分

白峰は舊牛首風嵐二村の稱にして避地の一小都
會をゑす家屋は丹碧黒漆の巧なりと雖ども冬季
大雪なるを以て皆數層の高樓をなし大に人目を
驚かしむ村の林西寺の惠美押勝の逃れたる舊跡
なりしも詣せさりしはいとも惜しむ十一時此地
を發するに臨み黒雲一抹遂お雨至る此に於て明
日の登山覺束なさを憂る宅へ宛一通の端書を出
せり雨漸次強くして凌くに由なく卷きたる外套
を解きて着すれい雨稍々停し蒸すか如き炎さ堪

ゆへくもあらず天道是耶非耶を唱ふて進めい愈
々險とあり加ふるに昨夏河水汎溢の爲め橋梁道
路已に破潰せられ往來亦辨するに由なし幸ひに
郵便脚夫の來りて前望後顧巖角を登り石稜に憑
り以て通行せしに會ひ漸く之に倣ひて過ぐるを
得たり更に進んで阪と登れば路左右に分れ尋る
に人なく求むるに榮なく進退谷まるか不如非常
の場合には非常の手段を以て處せんにはと決然
右を撰み進むこと暫時路又岐る木標あるも左大
杉谷鑛山道とのみ書し右何れとも明ならず斯様
の事ありと知らは豫め土民に聞置くへかりしに
と愚痴を漏せども早や十日の菊なり蓋し思らく
白山は手取川の上流なるを以て宜く何流に逆る
お如かずと大膽にも斷然右なるを撰ひたりるも
杞憂心痛交々至り道の正否を確めんと欲するも
人にだも逢はされは家をも見ざる凄しさ云はん
方なく唯縁風藍水の徒に叫ぶのみ漸くにして一

村家あり有耶無耶の裡に走り着き其の正道なる
を知れる一瞬時の欣喜雀悦譬にさるも解するを
得なん午後零時半稍々掬すへきの細流を得疲勞
空腹のため雨中ながら殘余の辨當半を食し終れ
は勇氣頓に百倍し自ら豪談快話口端お湧きたり
既にして休憩數回或は河原の巨石に踞り或谿間
の清流に掬し赤岩を過ぎ急流を渡れり又もや赤
岩の一本橋あり戰々恐々一人宛過ぎ橋畔に憇ひ
て橋の危險を談し川の奇景を賞す忽ち右邊の山
中より犬吠一聲耳朶を驚かし一疋の大狗何の雜
作ものゝく橋上を走りたるに膽を潰せり夫れよ
り峻坂を上下し山腹を盤回し三時四十分漸く一
の瀬に達す時に豪雨篠を衝き密雲道を鎖を乃ち
村家の軒下に待つこと暫時にして羊腸たる山徑
を迂回し煙滅せる磊道を辿どり遂に白山鑛泉場
に至る

鑛泉場は白峰の東南五里金澤を距ること十九里

白山支脈の山脚に踞し手取の清流に面し白山比
咩神社社務出張所二家の宿舍浴室鑛泉取締の凡
て五棟一區をなす宿舍の浴室鑛泉取締の凡
山田末吉方に投を晚餐后一浴を試むるに肢躰舒
腸頓に疲勞を忘る浴室は縦五間横四間半清潔に
あらざるも男女室を區劃し各内外二房となる外
部の微温湯にして内部の稍熱し其他別に外湯な
るものあり不淨疾患兩便失禁者等の入浴に供す
温泉は室内の巨大なる巖間より湧出す夜は其巖
上の神棚に數十の神燈と點し浴室燦々として眩
たり八時寢に就けは褥床暖かに四躰早や夢中に
逍遙し唯山籟の水聲と和するあるのみ
二十六日 午前九時起床屋外には陰雨未だ全く
尽きすして澹滴の聲淋し依て衆議一決し長途の
疲勞を癒し登山の英氣を養ひ明日雨晴るゝの時
を待たんと浴しては食し食しては睡り醒ては又
浴す夜に入り雨尙停まざりしも宿の主人に導者

(俗に強力)を依頼し寢に就くも目訝へて眠る能はず滑稽の談顛を解き喧噪隣客も迷惑を掛くるも意を介する所にあらそ

市之瀬温泉

鑛泉試験報告

鑛泉一種

山岸十郎右衛門

鑛泉は石川縣能美郡白峰村字白峰井三番地内より滴出する温泉おして初は無色透なきとも時と經は漸次淡汚綠色を帯ひ混濁して不透明となる其味は快爽酸鹹にして甘く且稍収斂性を有す其反應は微弱酸性と呈するも煮沸すれば著しく氣泡を發して弱亞爾加里性となる又其温度の氣温攝氏十二度半に於て攝氏四十三度半也今之か定量分析を施せば其千立方cm半三、四二五六grの乾燥固形分を含有し且つ左記成分の瓦量より成れり

石川縣能美郡白峰村字白峰

炭酸加里

〇、〇八九八五

炭酸麻屈涅失亞

〇、〇九七三一

炭酸那篤留謨

一、〇三二九三七

炭酸加留叟謨

〇、五八九六四

炭酸亞酸化鐵

〇、〇四〇八八

格魯兒那篤留謨

二、〇六九四〇

礬土

僅微

硅酸

〇、一六五四〇

硼酸

痕跡

重炭酸加留謨

〇、一三〇二二

重炭酸那篤留謨

〇、五二〇二〇

合計 三、四二四七〇

外に游離炭酸

〇、三四六七〇

以上の試験成績に依れば本泉は内亞爾加里性含鹽炭酸泉に屬するものとす

泉質 亞兒加里性含炭酸摺泉

石川縣私立衛生試驗場

明治二十九年七月十日 堀 太次郎

大藪 武松

以上試験報告確實と認めて証明す

從六位製藥學士 櫻井小平太

病能書

亞爾加里性含炭酸鹽泉

石川縣能美郡白峰村字白峰

入浴又ハ外用して効ある諸病

一日入浴回数 一回入浴時間

月經異常 一 一—三回 三十分以上四十分以下

子宮周圍炎及近傍 一 一—二回 二十分以上五十分以下

炎症後の遺物症

慢性咽喉加苔兒 一 一—四回 十分以上三十分以下

慢性腹膜炎 一 一—二回 十五分以上四十分以下

慢性癆麻質斯 一 一—三回 十五分以上四十分以下

慢性皮膚病 同 同

慢性氣管枝加苔兒 一 一—四回 十分以上三十分以下

内服して効ある疾病

萎黃病

大人三〇、〇—三〇〇、〇 小人三、〇—五〇、〇

慢性子宮炎及周圍炎

同四〇、〇—五〇〇、〇 同四、〇—八〇、〇

慢性腸胃加苔兒

同五〇、〇—一〇〇〇、〇 同五、〇—一五〇、〇

慢性氣管枝加苔兒

同五〇、〇—五〇〇、〇 同四、〇—八〇、〇

喘息

同四〇、〇—五〇〇、〇 同四、〇—八〇、〇

密尿病

同 同

腺病

同三〇、〇—三〇〇、〇 同三、〇—五〇、〇

痛風

同五〇、〇—四〇〇、〇 同五、〇—一五〇、〇

石川縣金澤市止善堂病院長

明治廿九年八月廿九日 醫學士 山田謙治

二十七日 拂曉蹶起すれば天候の澁顔未だ治まらす如ふるに細雲四方を塞き咫尺を辨せず遺憾あから亦も一日の籠城と定め高吟放歌時又「トランプ」を弄し圍碁を争ひ手拳と戦はし風流粹人を氣取ると雖ども無風無粹は何處迄ても無風無粹なり午后一大會議と開き明朝の天氣の晴雨導者の有無に關せず登山することに決せり夜天を仰けり明星煌々金風嫋々として明日の好晴言た待たす一行の喜ひ譬ふるに物あく殆んど狂せん計りなり九時入床俗談高笑の中何時か華ふ入りて鼾聲高し

二十八日 午前五時三十分禱と離るれば一天清澄陰雨の名残たに止めず太陽將に八荒を射らんとす急き双眼鏡と取りて望見すれば白山頂顛は白雲去り笑ふて余等一行を遙かに迎ふるもの、

如し乃急き導者の如何にと尋れば頃日蚕業の繁忙に際し一人の來る者なしと然れども余等已に昨日の決議あり何を躊躇すへき直に各自一舛宛の白米と負ひ豪然出發すれば宿の夫婦下婢は固より數多の浴客皆等しく余等の一行を送る白山比咩神社社務出張所に至り道刈錢と収め登山の木札を得山麓の一華表を過ぎたるは七時三十分なり阪路急にして險惡心臓の鼓動は呼吸も從ひ警鐘を亂打するか如く顔面蒼白苦悶實も名狀すへからす歩を休むること再三漸くあて階子坂の險を攀ち柳谷の流を躋り愈々登れば愈々險唾液尽き煩悶堪ゆ可からす遇一人數滴の濁水を發見し一吸氣の中に盡して他を顧みず嗚呼實に衛生も口あすへからざるあり残り三人は一滴たも口にすると得すして渴愈々甚たし右轉左廻險檜宿に至れば一双の古檜天を摩し枝葉蔭鬱畫尙暗し其下に面影のみなる社跡あり左方に千丈瀑を

見つゝ指尾豊坂を超へ漸く一の宮に登る之れ第一峰の頂上とて復上れば山愈々峻として路益峻巖角を攀し樹根に倚り殊に胎内竇の如きは何れも高さ一丈餘の大石路を狭み葡萄匐して過ぐるを得徑窮れば一大巖窟あり泰澄大師白山開基の際此處に剃髮せられしより剃髮窟とは云ふなり之より一峰尽くれば一嶺來り五倫坂、九折坂を過ぎ平原に出つ慶松臺と云ひ越前の慶松某創始に係る板屋の室堂あり以て賽客に便にと之れ第二峰の頂上なり頂上水あり掬それい清冷神氣爽かみ疲勞忘る休憩暫時當坂を超へ不動瀑仙人巖を見て畜生谷に降り十一時二十分殿池に登り渴と醫し各行厨を開て半と食し更に餓鬼か喉七坂御廐等峻阪を越へ御花畠に至れば奇花異草春日の如く一步一息進むに従ふて危険益甚しく左右皆絶谷中間僅く一線を通するを立髪の嶮とす阪頃に出て遠近の諸山と見渡せし緑髪翠黛を凝らしたる浴石の佳人の如く濃く將た淡く雲霞を帯ひ一は美觀を粧ふ水蒸氣一定の處に來れば急に結露して油然雲烟とあるの狀甚た奇觀なり五色濱を通すれば山忽ち開きて地廣く夷かなり是を彌陀ヶ原と云ふ原野茫茫々豊草け氈をふし時正に盛夏と雖も尙殘雪銀盤を布けり雪上に達すれば涼風颯然空を掠めて來り今迄乃炎威影をも止めす神身爽然たり試に雪片を得んとするも堅固にして取る能はず時に白雲脚下に生し忽ち前後を罩めて咫尺と辨せず依て互に呼應しつ進めは導者を従へたる二人の登山者に出會す休憩すること多時共み幾千の五針徑を狭み礪磐の巨石奇と尽そ天然の庭園たる五葉阪を過ぎ午后二時十五分室堂と達す堂は矮きも巨材と以て構へ長さ七間巾三間半數十人を容るゝお足の中央には爐を設けて登山者の煖を取り飯を焚くに供す余等直に旅具を解き餘す處の行厨を喫し共同分擔

以て携へし處の米を煮れば兼て聞きたる半煮の
難を幸に免れたるも水加減を誤りし爲め乾糧と
なりたるも一笑なりけり既に―て雲晴れ霧散し
日尙高ければ室を出て峻坂と登ること八町御前
の絶巔に達すれば毫も草木を見ず唯巨巖怪石の
磊々たる乃み遠く眼眸を放ては白雲銀世界の間
に諸山僅かに其角頂を露出し互に高峻と争ふの
狀頗る奇觀憾らくは案内多きと以て彼は何山此
は何嶽なるや知り得ざりしを踵を回し御前と降
りて路五針松苗を取り五時半頃室お歸る味噌汁
を以て乾飯を粥とあして晚餐を整へたる手練に
は恐らく下婢殿も三舍を避くるならん食后爐邊
に偃臥し夜具あければ革囊を枕にし外套被り一
睡一醒身は夢中に彷徨す本日的全宿者は合して
六人なり

二十九日 深更爐火の滅するに従ひ寒氣骨髓に
徹し一行期せずして夢と破らる更に燃材を爐に
投するも皆な生木全様にして容易に燃ゆへくも
わらす黒煙堂内に漲きり一同眼涙鼻涕の漉津瀨
をなしたる困難名狀すへからず漸く温暖を得再
ひ就眠せんとせしに忽ち本日の晝飯の乾糧は到
底食道を通らざるみ心付き更に辨當と解き共
水を加へて粥狀となり以て焚しに今度の乾糧變
して軟く餅狀となる大笑一番兩踵を合せること
數時東天未だ白からず喚ふ者あり曰く是れより
登山せんと驚き起れば午前四時堂内尙暗く起つ
音こそすれ人は互に見る能はず洗漱を了へ朝飯
と食し輕装して堂を出つれば山守既に綿乃帽子
「セル」の外褌に身を固めて待てり余等一見其紳
士風たるに一驚せり嗚呼文明の風は此深山に迄
吹き來りしか山守に尾して登り日出を觀んと欲
せしも宿霧未だ全く収らざる浮雲風に從て起り間
余と辨せよ爲に其意を果さず行くこと二町斗青
石あり高天ヶ原に至れば一小堂あり天照皇大神

を祀る之れより休憩數次漸く御前に達を高さ八千九百四十七尺最高峰とて祠あり白山比咩大神を祀る之を國幣小社白山比咩神社の本院とて山守神扇を開き予等參拜畏敬良久ふと祠側の小丘に測候臺を建て傍らに岩巖を圍て技師の住居あり當時陸軍參謀本部より派遣せられし歩兵少佐以下四名外に入夫二名あり豫定廿日にして富嶽白山立山間の距離等を測量を尙一日の快晴を得は全く終るありと祠の後に當て危峰直削巖石骨となり砂礫衣をちし望むべくして攀つへからざる劍山は大巖巨石倚疊して形ち倉の如き寶庫と相距て其谷を地嶽谷と云ひ油屋、紺屋、血の池、百姓、普照院の五地嶽とて池水あり何も清澄鏡の如く深潭藍よりも碧なり惜むらくい雲烟模糊として美濃、飛彈、信濃の群山巒峰微かに斷雲の間に隱見し平野、河流、海濱、島岐、城邑の大觀を歷々指點し得さりしを御前阪と降り大汝嶽に向ふ六道の地藏より地嶽谷を通り千蛇ヶ池の積雪氷結せし上を渡り殘礙遺掘のみなる畝傍祠、十萬の「コンゴン」堂を吊ひ大池に至る其高さ八千六百十八尺御前を距る八町石礫鑿々石齒呀々鞋を刺し足と噛む絶頂に達せれば地稍平濶なり徘徊四顧天暮き爲め宇宙の大、八荒の廣と一瞥在席の間に収むる能はを唯一祠あり大已貴命を祀り白山奥院と云ふ山守亦神扇を排し錦慢半は揚げの神光六合に塞り一行拜跪を社前に芽鞋積んで丘をなほ蓋し登とる者必と此に穿つ處のものを棄つるなり之れ白山と立山とは高さ伯仲とるの争より起りたる故事なりと余輩亦穿つ處のものも棄つ山守に勞を謝して離を告げ急に道を轉して尾添に取る之れより先き余等別山を越へんと企てしも徑甚危險加ふるに案内者かく空しく斷念せり（別山は高さ七千七百九十二尺御前を距る三里半絶頂の祠には大山祇命を祀る獨り別

山の頂は富嶽を望み得へしと云ふ。既に案内もなければ導者も多く山守に聞きたる一筋道を守り互に左右を指點し前后と願望して降る偶々白雲纒霧の起る所雷鳥三羽飛躍するを見る大鳩の如く白羽翩翾の斑するに駒色を以てし鳴聲秋蟲も似たり枝柯盤根たる五葉松の間を下ること八町路頭盤石の手水鉢横り清水を湛む御手水場と云ふ尙進て鷓ヶ野の渡、精靈田、龍カ番場等を越へ四人塚に至れり忽ち徑濶くして琴を失ふ衆周章狼敗密雲細霧の間を搜索するの状恰も滿洲の野を斥候するか如く全身は白く眉毛睫毛露を帯ひ氷を結はんとし寒氣凜冽殆んど堪ゆ可らず漸く正路を求め長坂の密林を穿ち瓶破坂、桑清水の渡を経て十時三十分加賀室と進めは石角足を噛み惡草根を結んで窄蹊を設し歩行の困難を極む天池の野、賽の河原と過き十一時彼の危険を以て有名なる美女阪に到る御前を距る四里半なりと坂の長からざるも急にして砂礫累々歩に従ふて崩れ鑿々聲あり坂尽くる處一綫纒に通一兩側削つて斷崖となり開いて坑谷となり窈然として深く且つ廣し恰も馬鬣を行くか如し之を千翠カ鼻と云ふ若し強風横さまに來らば則其捲去する所とならん登山者の所在と失する者皆此處なりと云ふ殊に石稜に攀ち坂を去らずとするま際し未だ趾の届かざるに先たち膝の脱せんとせし時に當つてや身既に此世を去り千尋の奈落に墜没せるの感あり其危険口噤し唇顫ふて語ることをいす急坂を登り險路を降り密林を穿ち一歩一傾屢々足を失せしも漸く危と免れ始めて喬木の繁茂せる山林を見る時は驕陽閉込たる雲霧を透ふして炎威を振ふ依て一大樹の下に憩ひ急お冬装を夏束に變し願望すれり白山嵯峨として雲際に突出し經程斷雲み隠見し蟠龍の山と抱き雲を呼ぶに似たり更に歩を進めり水無八町に掛る之

れ峠尾の川源にして水流石下に伏する處巨石相錯り怪岩相亂れ路高き楷段を下る坂將に尽きんとするとき泉其下に湧く掬するに水極めて甘冽なり之れ有名なる御佛餉水おして俗に船底丘上大乗寺の池水に通すると云ふ夫れ或い地下水の理よよりて然らん一人曰く余等の家井も或い烏拉爾山頭の池水と通し居るも謀られすと呵々大笑せり登山者必ず此處に行厨を開くと余等亦余す處の行厨を食し休憩暫時にして去る峻峰右に聳ゆる嶮嶽左に峙し黥雲忽ち結露して驟雨至る壓曲盤旋愈々深くして愈幽其尽くる所を知らず漸く大石尽くれい川なり乃ち衣を攝し瀬を渉ること里餘之れより峠尾川に沿ひ下ること又里許山漸く開け林終に盡き始めて人家を望む村翁余等の服装を見て曰く金澤營所からの御巡廻かど余等曰く實は然りと傲然潤歩す其特意思ふへし夫れより平路砥の如く五時半尾添村に着し鶴尾

金三郎方は投す主人茶菓子とて「ナンバ」焼「トヲモロコシ」と饗し晚餐至る菜羹甚た粗るるも飢腸飽きて明日の歸宅を樂しみ快眠に就く本日の行程九里なり

三十日 鶏鳴曉を告げ東天白らむ漸く離床し宿泊の勘定をなすに及び女原に比し物價の高貴なるに驚けり六時四十分輕裝宿を辭し村内の白山様と云ふに詣て村を出つれば青鞋露を踏て歩輕く快云ふ可らず中宮村に達し之より數町一坂盡くる處橋あり巨材を横へ藤蔓によりて之を繋ぎ巨石より巨石に架し以て對岸お至る之と渡るに動搖甚し然れども前日け危険お比すれば何を意に介するに足らん七時半又一の藤橋を渡る夫より平路且つ談し且つ笑ひ陶然として歌ひ悠然として行く瀬戸村を過ぎ終に右牛首左中宮の岐路に出つ時お驟雨大に至り三里程の間全速力を盡して一回も休憩を取らず一時間半にして吉野に

達一茶亭に憩ふ附近の清幽と探らんと欲せしも

を作る

歸路と急さし爲め后日を期し吉野と發せは天晴

れ太陽炎威中天に振ひ熱風面を掠め苦汗衣を絞

り隨て拭へは隨ふて流る神沮一氣耗し午后一時

漸く白山比咩神社に詣り神饌を供奉して一行登

山の無難を謝し畏敬之を久ふす既にて神管三

樹を頷つ恭しく土器を捧け神醇を傾くると兩三

杯各自空腹の故と以て大に酩酊し一層の爽快を

覺ゆ鶴來に至り某店にて飽食休憩の后時に三時

出發す之れより悠々漫々として進み六時終に金

澤に着し各自無事の歸山と祝し宅に向ふ

私かに期す余等今や己お三大莊觀の一と踐み山

乃高さを極め谷の深さを究め征清征臺軍士の邪

寒隆暑の寸分を味ひ飢寒凍餓の幾分を嘗め造化

の妙を品評し心の天地と蠲解し氣は自然と協合

一之れおより雄壯の氣慨と發揮し心身よ裨益せ

し所少なからと即ち敢て蕪才を省みと此れか記

雜 報

○第六回通常會 我十全會は先きに中濱醫學博士の來澤を期と一六月十五日を以て第四高等學校本館扣所に於て第六回通常會を開催せり午後二時開會同博士及醫學部職員學生一同出席先づ副會長高安主事は會長代理として起て開會の辭に併せて中濱博士の臨席を深く感謝するの意を述へ次て左の演説及談話ありたり

第一席田原氏消毒燈に就て 教授野田忠廣君登壇近時購入せし同消毒燈を席上に持し來り一々優快なる辨を以て其構造を説明し且其應用と精細に教示せらる

第二席免疫論 醫學博士中濱東一郎君柏手喝采の裡に登壇せらる博士音吐清朗辨説亦快なり先

つ血清療法の起源より今日に至る迄の變遷と述

本會特別會員たる事を承諾せられたり

へ是れに加ふるに自己の經驗と意見とを以てし
微頭徹尾秩序亂きを論脈整ひ熱心なる態度と沈
重なる辨説は益々聴者の同情を惹起せしむ斯く
て再び拍手大喝採の裡に降壇せらる(演述の大
要は載せて本誌原著實驗欄あり)

第三席實驗談 醫學士木村孝藏君登壇前會は小

きんる事を望む

川教授の演説に習ひ實驗談にわらず失敗談を爲
さむと學士か既往十數年間金澤病院にて經驗せ
らるし治療手術の中特ふ自身の誤診又ハ失敗せ
し實例をわけ吾人か將來を戒めむとて諄々とし
て演せらる而も終始滿坐の大笑を贖ひ聽者をし
て興に入らしめ不知不識の間利益せしところの
もの甚た大なりき

○岡部教授の辭職 皮膚病梅毒科長たりし教授
岡部忠氏病氣の故を以て今回職を辭せらる吾輩
は茲より厚く從來薰陶の恩と謝せると共に將來の
健在と祈る

○下平教授新任 曾て醫學界に令譽噴々たりし
山梨縣立病院長下平用彩氏ハ今回木村教授後任
として本校教授に任命せらる吾輩豈歡呼之を迎
へざらむや

右終つて高安副會長閉會を告ぐ時に午後五時晚
鐘東山に響く烏兔西山に没せるの頃なりき

○木村教授送別會 七月二十八日本校學生より
なる送別會は野田寺町古今亭に於て開かる當時

○中濱博士の入會 醫學博士中濱東一郎氏今回

恰も暑氣休暇に際し歸郷せるもの多く爲めに一般學生の悉く集ることを得ざりしは遺憾なりき於是乎一部有志の發起により更に金澤病院醫員及舊卒業生等にも糾合し普く金を醸しゴルドノダールを送呈せり

せ新に六十の俊英は來り投せらる我曹焉んを歡迎せざるを得ひや而も一同相舉りて我十全會に入會せらるゝに於て我輩をして更に情誼の離るへからざる者あるを覺へしむ願くは諸子爾後本會の主旨を遵守し益々其義務責任を躬行實見せらむことを

○岡部教授送別會 學生間み企てらきんとせしも同教授病氣の爲め固辭せらき遂に中止するどころとあり醫學部愛驗生及三四年生一同より茶器と送呈せり

○役員の改撰 本會規則により今回本學年役員改撰左の如く任命せらきたり
會長 川上 彦次 副會長 高安 右人
評議員 櫻井小平太 評議員 小川 勝陳
全 野田 忠廣 全 山崎 幹
全 高橋 剛吉 全 金子 次郎

○學年始業式 本校は例に依り例の如く九月十一日午前九時を以て本學年入學式を例場に舉げらきたり教官職員及新舊學生乃就くや川上校長は壇に進みて靜に入學式の辭を述へ新舊學生を紹介し次て嚴かに五綱の學生心得を朗讀し更に新入生に對して訓諭するところあり、こを以て始業式を終ふ

幹事 贊成 岡本京太郎 幹事 贊成 堀 大次郎
會員 全 藥學科 山崎清一郎 全 藥學科 内山忠次郎
全 三年 失鳩 佳太 全 二年 眞柄佐一郎 全 一年 牧 良 一
全 一年 失鳩 佳太 全 一年 松本善次郎

○新入生諸君を迎ふ 東西笈を負ひ南北書を載

編輯特別委員會 松本善次郎

編輯特別委員 堤 從 清 全醫科四年番場 友平

全醫科四年久保 捨藏 全全二年 深見貞之助

全全 吉川 砥直

○各課主任の任命 九月十八日左の任命ありたり

り

教授 浦井鐘一郎氏 (圖書課主任)

教授 宮本平九郎氏 (庶務課主任)

助教授兼書記 佐野 安磨氏 (寮務主任)

書記 森川 正名氏 (會計掛主任)

書記 吉村 政行氏 (庶務掛主任)

○級長幹生の任命 級長及幹生規程および九月

二十日左の如く任命ありたり

教授 山 碯 幹氏 (醫學科第四年級々々長)

教授 小川 勝陳氏 (同 第三年級々々長)

教授 野田 忠廣氏 (同 第二年級々々長)

教授 金子 治郎氏 (同 第一年級々々長)

教授 櫻井小平太氏 (藥學科第三年級々々長)

教授 高山 基重氏 (同 第二年級々々長)

助教授 堤 從 清氏 (同 第一年級々々長)

醫科第四年級幹生 松原三郎、生沼曹六、

番場友平、

全第三年級幹生 河内監次郎、大塚正一、

全第二年級幹生 中西政太郎、中島擴三、

小林茂樹、河野勇、

全第一年級幹生 富野佳照、島村源太郎、

飯塚忠勇、春日健治、

藥學科第三年級幹生 山岸理一郎

全第二年級幹生 内山忠二郎

全第一年級幹生 村澤錦一郎

○學科長の任命 九月二十日左の如く各學科長

の任命ありたり

教授 山 碯 幹氏 (醫學部第一學科長)

教授 小川 勝陳氏 (全 第二學科長)

教授 野田 忠廣氏 (全 第三學科長)

教授 金子 治郎氏 (全) 第四學科長)

教授 櫻井小平太氏 (全) 第五學科長)

講師 磯田 正謙氏 (全) 第六學科長)

○柿田信行氏 教務係柿田信行氏は九月二十五日其囑託を解かれたり

○教務課事務囑託 囑託松田菊治宮川爲三の両氏は九月二十七日兼教務課事務取扱を囑託せらるるをたり

○高安主事嚴父長逝 金風飄々落葉を拂ひ秋氣慘憺人よ迫る此時此際九月廿五日本會副會長高安主事嚴父忽焉として長逝せらる噫悲哉 本會先きに此訃報に接するや直に吊電を發して吊意を表す

○矢口、山丘二氏逝く 嗚呼玉碎蘭摧の歎何をしかく繁さや前月同學の數氏を失ひ悲哀の涙未だ乾かざるに今又醫科二年矢口雄司君、醫科三年山丘國太郎君相續ひて逝去せらるる人生朝露の

如し生死もど愛惜すへさに非すと雖ども前途多望の身を以て一朝二豎の犯す所となり恨を呑んで空しく九泉の下に逝く痛惜哀悼せざらんと欲するも得へけんや噫

○村上教授令息死去(特志解剖) 村上教授令息義徳君(七ヶ月)の兼て病氣の爲め臥褥せらるるか十月五日午前二時忽然逝去せらるる習日同教授は特志より當醫學部病理解剖室に於て其死体を剖見せられたり此日各職員學生臨場し小川高橋兩教授刀を執らる

嗚呼君か平素斯道に與へらるゝ効績は偉大なるにも拘はらず尙其遺骸を以て忍ぶへからざる愛を割さ耐ゆへからざる情を棄て吾曹學生は爲め將た斯學を進歩に供せんとの志望を抱かるゝの吾曹は感嘆お堪へさるるところにして又深く先生の特志を感謝して止まざるなり

○解剖屍体精靈追善會 十月十六日午後一時よ

り田丸町専光寺に於て解剖屍体精靈追善の法會を執行せり當日參詣者は川上校長を初め醫學部職員學生一同及被解剖者遺族等にして十數名の僧侶丁重なる讀經あり終つて校長、職員、學生總代、遺族乃抹香等あり斯くて靜肅に式と終へたるは午後五時頃なりき

○秋季短艇競漕會 同會の豫期れ如く十月十七日大野河流に於て催さるたり當日は朝來一天拭ふか如き快晴にて甚た盛會を極めたり

○澤賢吉氏 久しく金澤病院眼科に在勤せらるし同氏は去月職を辭し七尾私立第一病院の聘よ應して赴任せらるたり

○金子太須計氏 は醫科大學第一醫院内科教室解雇の上七月一日金澤病院醫員に任命せらる

○大澤五月氏 は過般陸軍三等軍醫に任せらる
○室田萬三太郎氏 は共濟生命保儉會社に職を奉し目下和歌山縣下に出張せらるたりと

○中川幸庵、嶋田吉太郎の両氏 は今回新設の内務省直創永樂病院内^三醫員を拜命せらる

○中嶋正恭氏 は郷裡に歸りて開業せらる

○星野正齊、西川清三郎、松川浩太郎れ三氏 は豫備召集に應し八月廿四日當地を経て名古屋歩兵第十九聯隊へ豫備見習軍醫として入隊せらる

○紺谷良作氏 今回檢疫官に任せられ専ら黴菌學と研究せらると云ふ

○竹中繁太郎氏 は山梨縣檢疫官に任せらる

○鈴木寛之助氏 は横須賀鎮守府病院より更に同海軍病院附を命せられたりと、近信又「海軍諸條例改正となり醫官の排置も擴張せられ前途益々有望云々と其特意思ふへー

○千田榮三男氏 は久しく保養中の痼疾大に癒

へ今回金澤病院に入り外科醫員拜命せられたり
○澤田定信氏 は今回金澤病院醫員を辭し北海道函館お於て私立病院を開かれ本月十五日當地

出發せられり

○藥學科と化學 本年度より藥學科卒業試問課
目中更に化學の一課を増加せられたり

○高山教授 先に育腸炎に罹られ専ら靜養中な
りしか頃日は頗る快方に赴き全快近きにあるへ
しと云ふ

○藥學科と著述 先きに編輯委員に於て慎重な
る校正を経たりしオット氏「裁判化學」は今や刻
新たに成り會報又將お編輯中に屬すと紙上諸子
が一年間に於ける眞摯なる研鑽嶄新ある學説に
接する亦近きならんか其他猶聞く處によきは
豫て櫻井教授が著述中なりし某書も曩日既に其
推敲を終へ東京某書肆へ送附せられし由なれば

○藥學科卒業生は動靜 六月、武庫川光寧、高
島初四郎、市村鐵外、圓山萬三郎乃四氏相率ひて
陸軍々醫學校に入り七月、小西虎次郎、石田太吉
橋本安吉、松坂治助、渡邊鐵乃五氏見習藥劑官を
命せらる藤田雄三郎氏は八月陸軍藥劑官に任せ
られ淺野藥劑官は九月更らま臺南衛戍病院附を
命せらる

是れが出版を見るも又遠きまわらざるへし

○吉野艦縦覽 征清の役到的所を海上に轉戦し

○鑛泉分標 藥學科第三年生一同は過般衛生化
學實習として越前阪井郡蘆原温泉へ赴けり猶其
詳細は近々出版せらるへき藥學會々報に載せら
るへき筈なり

て偉功と奏したる軍艦吉野八月六日金石港に來
て繫泊し縦覽を許す吾校生休暇中に抱らす金浦
の集合地に到るもの百余名然るに此日風怒り波
笑ひ喧譟れ裡漸く一舛舟を以て學生の少數を送

○櫻井教授 十月七日母堂急患の爲め遽ま上京
せらる

りしのみにて全學生は縦覽するを得さりしは遺
憾なりき而して艦は尙兩日間止まりしふより再

度の足を更さ不満の腹を充たせしもありしと

○秋季陸上大運動會 例年の如く本校醫學科四年藥學科三年及大學豫科三年生發起となり去る天長節の佳辰を卜し本校運動場に於て行はれたり當日は幸に前日より快晴續き碧空拭ふか如く

一點の浮雲も無く天高く氣開け陽春にも優りたる氣色なりき來賓の重なるものは文武各高等官諸學校職員及市内紳士紳商にして其他公衆の縦覽人は四方より蟻集し左しモに廣き場内も立錐の餘地たになま場の入口には一大綠門あり之を通過すれば珈琲店、接待所、をぞけ俱樂部等何れも經覽者の人氣を引き意匠妙巧接待周到ありき會場の正面に來賓席委員席會員席等相接して立ち我十全會の寄附に係る衛生部の如き甚た完全を極め藥學部寄附リモナーデ店又是に續ひて設けらる八時半頃數聲の鳴鈴轟きて開會は報せらる判定係の呼出しと共に第一回より第六十回

迄の競走は順次歩と進めて行はれ午後五時頃に至り首尾能く終りと告げぬ茲に於て各會員は圓陣を作り校長の音頭に伴ひ我校万歳と三唱し酒肴を味ふて散會せり因に當日本會より金拾五圓及衛々部を寄附したり

○第十回醫學部卒業證書授與式 十一月九日午前十時より本校倫理講堂に於て執行せられたり先づ川上校長は忝しく勅語と捧讀し夫れより醫學科卒業生三十名藥學科卒業生五名へ卒業證書と授與し且卒業生に將來の希望を述べ次に醫學部主事高安右人氏は卒業生に訓諭するどころあり併せて昨年授與式以來一年間の報告をなし次に醫學科卒業生總代白井精一氏藥學科卒業生總代佐藤拾三郎氏の答辭あり之みて式終り別室ふて來賓一同へ立食の饗應ありたり

當日卒業證書を受け得業士の稱號を得られたる諸君は左の如し

醫學科

- | | |
|-----------|-----------|
| 白井 精一(石川) | 八田 外二(石川) |
| 本田三次郎(石川) | 藤岡 勝治(石川) |
| 河合 鸞(福井) | 高岡 榮(石川) |
| 北 豐 吉(石川) | 岡部元次郎(石川) |
| 安村 順吉(石川) | 國分 金城(石川) |
| 藤井 温良(石川) | 金森 種次(富山) |
| 齊藤 幸作(富山) | 辻 岡 律(福井) |
| 佐野 里吉(石川) | 太田他計作(石川) |
| 五堂加一郎(石川) | 長谷川精一(富山) |
| 永井 源吾(石川) | 宮島 健治(富山) |
| 富澤外次郎(石川) | 松浦 啓三(福井) |
| 橘 左 内(福井) | 河村 多郎(石川) |
| 木下 克雄(福井) | 鹽谷 義一(岐阜) |
| 三木 三郎(石川) | 松井梅次郎(富山) |
| 高口保三郎(石川) | 岩食兵次郎(石川) |

佐藤拾三郎(石川) 金谷 彦次(石川)

長郷 修三(新潟) 淺井文太郎(石川)

八十島庄五郎(石川)

○第十回醫學科卒業生祝宴會 例の如く本月九日を以て野田寺町古今亭に於て本校醫科卒業生祝宴會を開かる樓の入口には一大國旗を交叉し數百の球燈を以て場の周圍を繞らし會場の上段は來賓及職員卒業生の着席に充て中史には一大花瓶を飾り左右の兩側は會員の席と定めらる午後四時會員一同着席するや臂頭第一に松原三郎氏は發起人總代として開會の主意を並せて卒業生諸君の前途に關する希望を述べたり君の演述は無慮數千言にして滿腔燃ゆるか如き熱情は一語一語に迸出し其熱心なる態度と快活なる辨舌の内に聽者の同情を惹きたり

次に甲谷三吉氏顯はる君昨秋祝宴會上快辨を奮ふて吾人と驚かしむ故に君の出づるや滿場の多

藥學科

數は拍手喝採の裡に歡迎せり蕩々たる辨堂々たる言盛又醫學得業士の品位と論し前途益々多望あることと述へたり熱心面み溢れ氣焰萬丈肉動き皮跳り壯絶快絶禁する能はさらしむ

次に渡孚貞氏は慷慨的辨を以て激越の辭を綴り卒業生將來の航路の至困至難なるを警告す時に聲高くして軒昂時に聲低くして神思沈默人をして言止みて聲尙耳底にゐるを覺へしめたり

次に吉川砥直氏嚴肅なる態度を以て祝辭を述ふ次に番場友平氏一片の離別文を朗讀して切々たる情を訴へたり滿堂寂として落葉聲ある覺ゆ次に校長川上彦次氏は最も慎重なる語氣を以て次の如く述へたり

諸君今日は我第四高等學校醫學部卒業生祝宴會あり而して予も幸ひして此會に列せると心得たり依て聊か茲に一言を述へんと欲を予か今春上京中其筋の人より聞く今日我國に於て

年々要する處の新醫實は八百名なりと然るに目今大學、五高等學校及府縣立醫學校等より出つる卒業生を計算するに到底之を完全とること能はざるなり

本校の如きも將來益々入學者の増加を計り愈々其盛大と期せんと欲す卒業生諸君も亦爾後此獎勵お向て尽力あらんことを望む云々

右終て卒業生を代表し白井精一氏起て謝辭を述へり君の言ひ長からず君の語は迫れり短きは意味深ければあり間なきの誠意滿つればなり實に句々肺肝より出て直み來りて人の心裡に透徹せり次て酒宴に移る肴に山海の珍味あるにわらず酒は醜醜の美香あるにわらず淡泊磊落は學生の本領酒酣にして渡氏の西洋手品會者の一驚を喫せしめ高橋常作氏の滑稽的祝辭は大に聽者の愛嬌を惹き終に覺へず抱腹絶倒せしむ夫れより劍舞に移る久保捨藏氏先づ起て光芒電

因夏猶寒き日本刃を舞ふ續ひて村田讓、北川健 知ありたり

三、吉田幡誠、松王數王等諸氏交々起て舞ふ壯絶
快絶人をして扼腕奮起せしむ
○鈴木醫學士の尺牘 目下獨國留學中なる特別
會員鈴木醫學士より又遙に書を本會に寄せらる

其他茶番滑稽百出し跟々として跳り翩々として
舞ひ一興尽きなんととして一興來り一味去りかん
として一味出つ吟聲堂に滿ち歡呼樓を動かす斯
止まざるあり
を感謝すると共に又益々將來の愛顧と懇望して

て鐘聲十點正に是れ客去り酒冷なるの時なりき
拜呈各位益々御清適奉賀候其後の大に疎音に失

○木村教授の消息 木村醫學士に愈去る九月
五日横濱出帆の佛船ヲオス號又乗組み出發せら
れたり船内には牧野伊太利公使其他海陸軍々人
等の日本人七名乗込まれ上海にて田代醫學士も
同船し同九日サガリエン號に乗換へ吳淞川を上
ること二時間にして上海お着せられしは十月十
日あり此れより東洋車にて上海領事館に至り馬
車にて市中を見物し東和洋行なる旅宿に投し此
日醫師原口某の饗應と受け翌朝本船に歸り前十
一時解纜し十月十三日香港お着せられたる旨報
一申譯無之候借て何か珍敷事にては御報知可致
新乃事柄も一向無之又當時交通の便利ある時代
報知前己に百も御承知の事加之小生の不文到抵
充分ある御通信も出來すと存候此義不惡御赦し
被下度候十全會も日を追ふて盛大と相成る様子
小生も大に満足罷在り候今后猶は益々降盛を相
期し候又十全會雜誌毎回御投送被下萬謝の至り
お候恰も會員諸君と互に膝を交て談論する心持
にて常に反復愛讀罷在候又雜誌にて森口、田所

兩君の訃音に接し候前途多望の士にして此不幸ある眞に氣の毒の至りなり小生も種々なる都合有之當夏期は當地「コルフルグ」へ相轉し候日本人とてハ小生一人之れ迄伯林にて數多の同胞諸氏と往來せるに比して話相手も無之隨分寂敷次第なり乍去其の割合に勉強も出來ず候當地は普魯士領おして人口凡そ一萬二千程の小都會にて「ラーン」河畔に在り市街は突出せる丘陵の周圍にあり到る處磴梯多き丘陵上に舊「ヘッセン」國の城趾あり眺望頗る佳あり此地は別に之れと云ふ事業ある地も非らず所謂大學町にて唯大學あるに由て名あるのみ其大學も然し餘り大あらを候又他の分科大學の様子は分らざるも醫科大學は一般に教授機關も良く具備せる様なり其裝置伯林の如く廣大ならざるを以て日本への參考には適當と存候徒らに西洋の廣大のみを觀て歸りて放螺を吹くも其尺度は日本に適合せざる爲め日本今日に適合し得る事物を觀察すること國家の利益と存し候又二三有名の學者を擧げんには病理學には「コルシヤン」氏（ウイルヒョ氏其職を去らは多分氏か「ゲチンゲン」大學の「オルト」氏其候補者たらんと云ふ）衛生學に「ペーリング」氏（彼有名かと）「ジフテリー」免疫の發明者なり小生は未だ面會の機會なし氏は市公園の近傍に別お私有の研究所を設け頻りに研究の由）又内科には「コンコップ」氏外科には「フェステル」氏産科婦人科おは「アルフェルド」氏生理學に「コッセル」氏（細胞化學に名高き人あり當時醫科大學長なり）藥物には「コイエル」氏眼科には「ヘッス」氏解剖には「ガッセル」氏（氏は有名なる「リーベルキユン」氏より次ぎ教授の椅子を占めたる人にて以前は隨分胎生學上の仕事をなしたるか此頃の餘り仕事をせざる様なり年齢五十歳今猶は獨身日々庭園の灌水も餘念あき様子

なり) 等あり又近來は當大學も學生の數増加せる由全体にて千余名醫學生には三百程なりと云ふ獨逸の學生は一般に夏期は地方に散し冬は大都會へ集る由學期の獨逸にては夏冬二期又分れ夏期の四月中旬より七月迄八月より十月中旬迄は休暇十月中旬より來年三月下旬迄を冬學期とす然し其間に「ワイナット」(十二月)「チステルン」(四月)「フィングステン」(六月)等の祭日ありて一週間乃至二週間も休むなり故に實際一ヶ年中眞面目に授業の有は凡そ七ヶ月位のものなり此等の事は決して日本に輸入する程の實事あらざるへし又一週間にても土曜日は休業なり此は學生連中近邊の「ビール」屋に集まりて頻りに例の切合を *Schlaeger mensur* をなす故授業あるも出るものなし自然休業となる譯なり小生一度見物に參りたるも随分馬鹿氣たる休方なり餘り文明國の花とも申されし候又御承知の如く學生

間に一定の組合あり尤も有名なるは「ブルシエンシャフト」と「コア」あり此等組合は大都會にては左程目に付ざるも小都會にては中々盛にして此等の中にも小組合あり各々一定の俱樂部を有し *Kneipe* 或は勢力の少なき小なる組合は「ビール」屋にて常席を開らく皆一定の帽子帶標を有し其俱樂部は多く地勢の良き所にありて隨分美なり茲に集り互に談笑し飯食す隨分此等の方法は友義を厚し一種美風と云ふも切合に至りては野蠻極まるなり學生間にては大學に入りたる年數の多少によりて種々の名稱を有せり一体に學生間には夫々通稱ありて余にハ一向分らず

1. *Fuchs* (1—1₂ Semester) 2. *Brandfuchs* (2—1₂ Semester) 3. *Yungburch* (2—3 Semester) 4. *ehargelcher* (3—5. S.) 5. *Inactivor* (ueber 4 Semester) { Ann Ort の Auswaertig の

二種あり 6. *Alder Herr* (之れハ一旦其組合に屬したる學士教授連等凡そ學生の範圍を脱したるも

のと云ひ之等が主として出金し俱樂部等を保存す(と云ふ)

先づ學生の仕事は「*meeting*」に集まり「*beer*」と咽より出る迄飯んで大聲にて學生の歌を怒鳴るにあり翌日は宿酔よて之れには鮮魚の鹽漬を妙薬とする事恰も我國おて豆腐汁を珍重すると同様なり獨乙にては學生と云ふ種屬は一種奇妙な生活をするなり又學生の間は餘り學文に骨を折らざるか如し教授の方法も一般に學生に對しては講義などは簡畧にして且つ一學科を全く完結する様に講義するは少なき由なり一般の仕組は獨習と貴ぶか如し夫故書籍々實驗に關する事の充分に行き届き居る様あり何者今日の學文の多岐となる時代に於ては教授方も一々精細に涉る時は際限なく講義は固より大要を與ふれば充分なり詳細は自ら志さず學科の實驗場に入り研究せざるに在らざれば到底目的を達する能はざる

へし從て教授も劇に此等の實驗場に入るものと示導するあり兎に角西洋の學文は金にて買ふ事故随分一般に多額の學費を要す西洋にては勉強すれはする程金か入るなり日本にては當時財政困難先づ學校へても行て勉強でもしよふかど云ふ様な始末此邊は少く西洋と異なる所あり。西洋にての生活は一般に物價も高き故從て金も多く入り自然の理當時小生の生活の一端(余り立派の生計法も非らざるに左程吹聴する程の値なきも参考のため)を記さんお部屋代(此内に寝所用のもの一切手拭類靴磨等を包む)一ヶ月二十四麻(伯林にては四十四麻を拂ひたり)晝食料理屋にて一食一麻五十片(之れは文部省留學生には少々高價なり小生も不日廉價の場所を見付る積りなり併し食物だけは少しは味き物を食ふ可し身体か大事なり)晩食の下宿屋の婆さんの御料理五六十片位の少くも入りなり「*beer*

ル」一本(自宅にて)但小瓶なり十片料理屋にて一杯十乃至二十片(但一料理屋にて飯ひ時は給仕人に必らず少く「Fitzgerald」と云ふ名稱にて呉れるなり又使用の如何にて増減を五片より十片十片迄に至る)入俗一等にて一回一麻斷髮三十片より四十片位併し人事ハ此丈の事にて止まらずドーシテ如何に儉約するも一ヶ月食住及小遣に百五十麻は入用と覺悟すべし其他衣服月謝書籍藥品器械研究材料等を算する時は随分多額を要する次第あり小生が七月中に研究上にはのみ買ふたるるものを算する時は「ラブエクトグラス」「デツキグラス」「蛙鼠雞卵」「モグラモチ」「トカケ」

其他にて五十麻程出したり少く砂子瓶類を纏めて買ふ時は直く二三十麻を取られるあり其外時々は小使等に鼻薬をやらされは何も爲て呉れず其割り金の効能は随分著明なり彼様なる始末にて學文をなす事故金の入るは當然なり少くど

も一ヶ月三百麻は必要なり之れよても余り奢澤は出來す候(中略)

此書信到着の頃の諸君モ充分腦髓を洗濯して學業を初むる時分と存候各位國家の爲め斯學の加餐あらんこと乞ふ

十全會各位御中

又同學士より夏期休業中金子教授へ宛られたる書牘を得たれば左に掲ぐ蓋し泰西刀圭社會の一般を窺ふに足らんか

前略偕て小生儀四月十五日伯林より當地へ相轉し候此處には舊知己の「ツッセ」氏居りて万事都合長く同氏と同室に居り候當地大學は小ある割には万事整頓するやの評判にて教授も有力者多き由解剖又は「カッセル」教授(胎生學の仕事澤山ある人なり)「ヂッセ」氏(權教授)及び「ツームスタイン」權教授(此人は數日又權となりたるるなり)及び「ブラウン」と云ふ新助手あり健築は解

剖を除きては他は皆新築みれど解剖は舊來の儘には至て不都合に御坐候併し兎角歐洲は解剖學なるを以て却て東京の解剖より割合隘き様子なり目下新築案を提出し有之土地割も定まり居り昨日も「ブロイセン」國文部大臣の巡回もありたる次第不日可決新築に着手するならんと存候當解剖にて仕事するものは小生一人にて四方より世話を致し呉れ万事好都合満足の至りなり然し先生の書取より成たる論文などを御土産にする様なる考はなき故御安神被下度候郷に入りては郷に従ふと例令當解剖は従前より胎生學的の仕事多く動物學者中おも有名なる「コルシユルト」氏（無脊椎動物胎生史を著したる人なり）小生も今后少々胎生學の一端を覺たき所存にて蛙の卵位を日々ひねくり居り候。先般白耳義「ゲント」府に於ける解剖學會へ出席仕り候同會の土地の偏局せると時日の少々運さ爲め出席割合に少な候多くは佛流の學者もて演舌も佛語多く小生

には至て不都合に御坐候併し兎角歐洲は解剖學大家を眼前に見たる事とて多少の利益有之候獨逸學者にて主なるハ「ケルリツケル」（名譽會頭最早八十歳なれど壯健なる白頭翁なり實に大家の風采充分に備はり一種の威權あり）「ワルダイエル氏」「シワルベ氏」「メルケル氏」「ボンネット氏」「ステール氏」「フ、シユルツエ氏」「レッツチユス氏」（好人物なり）又白耳義にてハ「バンベツク」「フアンベネデン」「スワン等の諸氏なり小生の廿六日に到着午後より出席當夜は「チテル、ジユ、フ、ポスト」にて夜會あり列席日本語の演舌を強られ相手は毛唐人と思ひやり候が其翻譯又は閉口仕り候彼様顧問の仕事西洋でるけば出來ず飛んだ茶番なり但し列席したるも乃十一ヶ國の人物にて日本にては小生なり翌廿七日大澤氏來る午前出席午後市内を一寸見物し大澤氏は直に「アントウル」港へ行き小生ハ分れて獨り「ブリュセル府へ

參り候「ケント府の解剖は新築の様なるも餘り感心せず日本亦て其位のもの出來る積りあり「ブリュセル府は白耳義の主府だけに中々盛んにて小巴里の評あり解剖へ參りたるに新築落成なるも未だ轉宅せずと云ふ始末もて小使一人のみありし新築だけに立派なきと本尊様の殻なき小使は獨逸語か分らず目今の解剖室を尋ねる譯にも參らず其儘歸りたり併し之を見付け出す所の大學本部へ行き獨逸語の通辨者來り漸く搜し當たるに如斯の始末不都合な話あり然し「ブリュセル市中は獨りにて驅廻り非常に勞またり夫より「リエチツヒ府は解剖へ參り候此處は小生に一番氣に入り候（御驅走を受けたる爲にあらず）中々能く整頓致し吾々の摸範には充分價値あるべくと存候教授は「スリン」助手の「ブレンツユ」氏なり同氏は小生の爲め午飯を饗應せり然し猶ほ驚くは「ファンペネーデン」氏の動物學教室あり恐らくは獨逸にも彼様に奢澤ある教室は多分はあかるへしと存候夫より白耳義と辭し「ボンに抵り「シッフエルザツケル」氏に逢ふ同氏は中々懇切に説明致しくれたり「ボン」の従前より大家乃居りたる處あるも今は左程に感心せず建物に割合に廣大なり夫より「ストラスブルク」へ參り「シワルベ」氏「フィツテル」氏「ノーネルト」氏に面會殊に「シワルベ」氏「フィツネル」氏頗る丁寧お案内説明致しくれ大に利益を得候當地の日本大家の皆學文をあしたる古址もて彼等の住居せる家屋に小生も五六日間滞在仕候「ストラスブルク」氏以前「ワルダイエル」氏「ヨツセル」氏の居りたる所中々廣大なり夫れより瑞西國に入り「バーセル」府の解剖を見る「エルマン」氏は實に親切の人にて自ら残らず案内とあしくと午晝氏の住宅に伴き家族（夫人令嬢二）と同卓にて御馳走に成り候午后「ユルマン」氏畫家「シリール」氏を

訪ふ同解剖は已ま「アンドレアスウエザル(千五百年代)の開きたる處なり目下乃解剖十年前の建築あり左程大ならず二階は生理下の解剖あり夫より再び獨乙に歸り「フライブルグに抵る茲は大澤氏の留學地あり當地有各なる「ウイデルスハイム「カイベル「ラツペル等諸氏あり一人にも逢はず大澤氏の案内にて解剖と見たり一向感服せよ西洋おモコンナ所かあるかと思ふ位なり次きて「ハイデルベルグへ行く茲には「ゲーケンバウエル氏「マウレル氏在り亦た一人にも逢はず小使の案内にて教室を見る少しも感心せず健築もごめなり目下少々改築の様子なり併し土地の風景は實に良き處なり有名れ大樽を舊城址内に見る夫れより「ウエルツブルクに抵る茲には有名の「ケルリツケル氏(氏には逢はず)あり其他「マ、シユルツエ氏(ケ氏の世婿)「ハイデンハイン氏等あり「シ氏丁寧は案内をなし呉れ候

「ケ氏の在る丈けに中々壯大のものなり「ハイデルハイム氏より乞ふて氏の鉄へマトキシリン染色標本を得たり良き土産なり又ポウエリ氏を動物教宅に訪ふ中々丁寧に案内せり是をより歸宅(五月十五日)せり此行中お見聞を廣め伯林半歳の勉強より余程利益せり先つ今回道中一般はこゝんるものに候

目下當地にては日本人は小生一人先つ仙人氣取り時々寂莫を感じ候何か新聞があるなら御漏しを乞ふ (下略)

五月二十二日

金子學兄

マールブルグ府

鈴木生

Ketzehachstr, 57 marburg a/Lahn

す記して以て好意を謝し並せて會員より紹介す

列氏生殖器病學

第一冊 下平用彩君

公衆醫事 每號 同事務所

增訂 八版 診斷學

前編 下平用彩君

順天堂醫事研究會雜誌 全 同事務所

濟生學會醫事新報 全 同 社

國家醫學會雜誌 全 同 會

中外醫事雜報 全 同 社

日本眼科學會雜誌 全 同 會

助産の榮 全 緒方病院助産婦學會

中央醫學會雜誌 全 同 會

醫海時報 全 同 社

日本醫事週報 全 同 社

京都醫事衛生誌 全 同 社

北辰會雜誌 全 同 會

緒方病院醫事會報 全 同病院研究會

研瑤會雜誌 全 同 會

京都醫學會雜誌 全 同 會

智兒曼斯氏外科總論 一部 松原三郎 外六十四名

會 告

爾後賛成會員ノ會費ハ一

ケ年間金六十錢ト相定メ

會費不納ノ諸君ニハ雜誌

配布致シ難ク候ニ付此段

告知ス

第四高學校十全會々則

第一章 名稱

第一條 本會ハ第四等學校十全會ト稱ス

第二章 趣旨

第二條 本會ノ趣旨ハ會員ノ親睦ヲ厚フシ智識ノ交換ヲ圖リ以テ其美風ヲ養成スルニアリ

第三章 會員

第三條 本會々員ヲ別チテ特別會員、贊成會員、通常會員トス

但シ特別會員ハ醫學部教官及職員ヲ以テ贊成會員ハ醫學部卒業生及ヒ醫學部ニ緣故アルモノヲ以テ通常會員ハ醫學部學生ヲ以テ成立ス

第四章 役員

第四條 本會ヲ整理スル爲左ノ役員ヲ設ク

會長 一名 副會長 一名
評議員 六名 主計 一名
幹事 九名 委員 若干名

第五條 會長ハ本會ヲ總理シ、副會長ハ會長ヲ輔佐シ、評議員ハ會長ノ指揮ニヨリ必要ノ事伴ヲ討議シ、主計ハ本會全般ノ會計ヲ掌リ幹事ハ本會一切ノ事務ニ從ヒ、委員ハ幹事ノ事務ヲ輔翼スルモノトス

但シ幹事ハ其擔任スル事務ニ從ヒ是ヲ分チテ編輯掛庶務掛ノ二トナス

第六條 各役員ノ任期ハ滿一學年トス

第七條 會長及副會長ハ特別會員中ニ於テ評議員之ヲ推薦シ、評議員ハ特別會員中ニテ互撰シ、主計ハ特別會員中ヨリ會長之ヲ委囑シ、幹事ハ贊成通常兩會員中ヨリ互撰シ、委員ハ會長臨時之ヲ指名ス 但幹事ハ贊成會員ヨリ二名通常會員ヨリ七名トス

第八章 集會及雜誌

第八條 集會ハ之ヲ別チテ通常會、大會、臨時會ノ三種トス

但シ通常會ハ一學期一回、大會ハ一學年一回、臨時會ハ臨時開會ス

第九條 雜誌ハ每學期ノ初メニ一回發刊ス

第六章 會計

第十條 本會ノ經費ハ通常會員ノ負擔トス

第十一條 通常會員ハ毎月(七、八月ヲ除ク)金四錢ヲ本會主計ニ納附シ特別贊成兩會員ハ定額ノ金圓ヲ寄附スルモノトス

第十二條 本會ノ規約ハ十名以上ノ發議ニ據リ過半数ノ贊成ヲ得ルニアラスンハ變更スルコトヲ得ス

第十三條 本會ハ第四高等學校醫學部内ニ置キ諸集會ノ會場ハ役員其都度之ヲ定ム

第十四條 會則外ノ條件ハ別ニ之ヲ定ムルモノトス



●次號締切

本誌第五號投稿期日來ル三十一

年一月廿日限トス